

「天の父のみこころを」－マタイによる福音書講解説教 59－

創世記 第1章 26節～31節
マタイによる福音書 第12章46節～50節

説教 岡村 恒 牧師

主イエスはこの日、ご自分の周りにいる人々に手をさし伸べて言われました。「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」。(49節b、50節)

今日私たちは主の食卓を囲んで、世界中のキリスト者と共に、世界の終わりに皆で囲む神の国の食卓を望み見えています。代々のキリスト者もこの希望を握り締めて信仰の旅を歩んできました。

今朝の御言葉を読んでいて、使徒行伝の物語を思い起こします。「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と尋ねる人に向かって、キリストの使徒は、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と答えました。(使徒行伝 16章30節、31節)

キリスト者が数少ない場所で信仰を与えられた者たちは、この聖書の約束を握り締めて、家族の救いのために祈り、慰めを得てきました。主イエスの宣言が、その背後にあったからです。

この日、主イエスの母と兄弟たちが訪ねてきました。時の指導者たちの怒りをかっている主イエスをたしなめに来たのかも知れません。ところが主イエスは、「わたしの母とは、だれのことか。わたしの兄弟とは、だれのことか」。(48節)と言われたのです。とても冷たい言葉に聞こえます。私たちは自分の家族や友人、知人もまた信仰を与えられ、救いに入れられるようにと願い、祈ります。聖書の約束が、一日も早く実現するように求めます。この日主イエスは、ご自分の母や兄弟たちをお見捨てになったのではなく、私たちのことをご覧になりながら、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」(49節)と言って下さいました。

主イエスは、全地を造り、支配しておられる父なる神と等しいお方です。嵐をしっかりと静め、病人をいやし、死人を墓から呼び出すお方です。この主イエスが、この私に、私の家族や友人にまなざしを向けて憐れみ、「わたしの母、わたしの兄弟」と呼んで下さるのです。私たちが神を発見し、神に近づいたからではなく、神ご自身が、神のひとり子主イエス・キリストが私たちを発見し、憐れんで、私たちをご自分の

家族として新しく造り変えて下さるのです。

主イエスは、「天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」(50節)と宣言して下さいました。何ひとつ余分な条件をつけず、「だれでも」と言われたのです。創世記1章を見ると、神が天地を創造された時、そこには一つの目的があったことが分かります。神が創造されたものをご覧になると、「それは、はなはだ良かった」(創世記 1章31節)のです。神は喜び、満足されました。私たちが神の祝福を受けて生きる姿をご覧になって喜ぶ。それが神のみこころです。

主イエスは、私たちが再び、神の喜びとなるために人となり、地上に来て下さったお方です。神にそむき、ただ神の怒りを受けるだけの私たちを、新しく神の子とするために、あの十字架にお架かり下さいました。「だれでも」神を信じ、神の子として永遠の命を得るようになるためです。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3章16節)と書かれている通り、「御子を信じる者がひとりも滅びない」ことこそ、神のみこころなのです。

家族の救いを願い、祈る時、私たちは具体的な信仰の戦いを経験します。洗礼を受けた者は、神の国に国籍を持つ者となり、この地上では旅人、寄留者となるからです。しかし主イエスが、「わたしの母、わたしの兄弟」と呼んで下さる、ここに大きな慰めがあります。神によって信仰を与えられ、主イエスを救い主と信じて洗礼を受ける時、私たちは自分の家族を神の約束の御手にお委ねすることができるのです。共に、主イエスの兄弟、姉妹と呼ばれる日を、家族や友人を再び神から与えられる日を待ち望むのです。

神の救いに入れられ、神の祝福を受けて生きる日、神に〈私の愛する子よ〉と呼ばれて生きる日が来ます。神はその日、私たちを天の食卓につけて満足し、喜ばれます。神のみこころが完全な姿で実現する日だからです。今日、世界中のキリスト者と共に食卓を囲みながら、私たちはその日、終わりの日の天の食卓を待ち望みましょう。

(記 岡村 恒)